

図-10 含泥率の分布

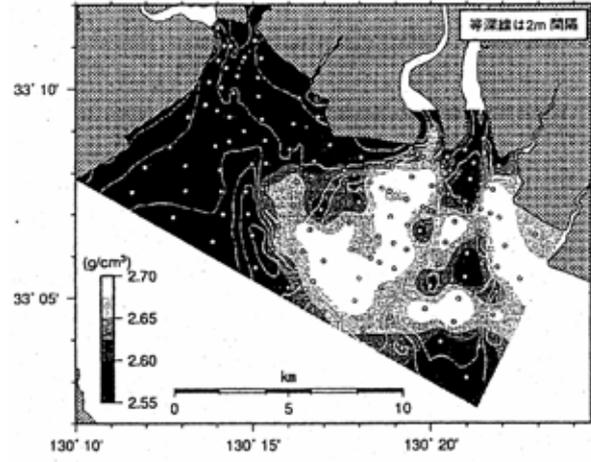


図-12 粒子密度の分布 (出水前)

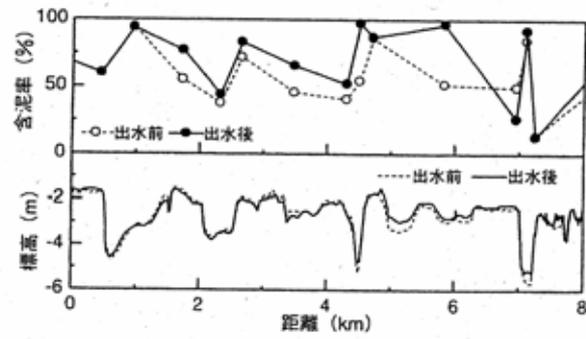
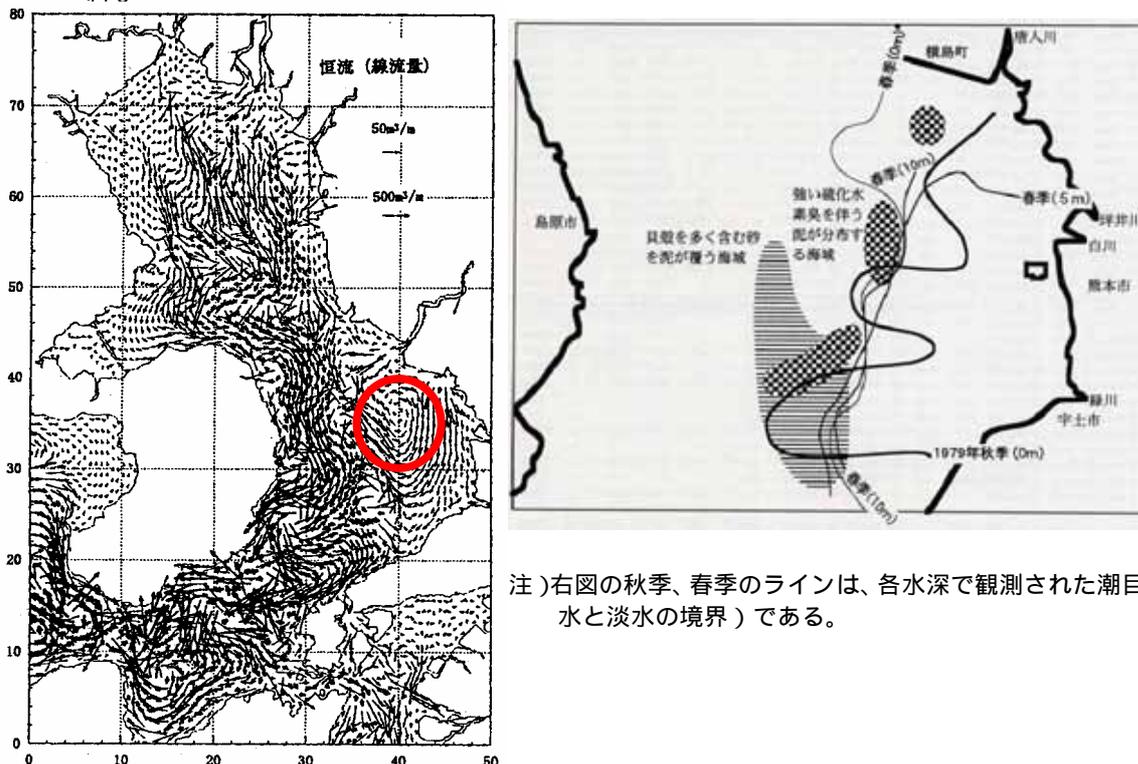


図-11 地形及び含泥率の分布 (X断面)

【資料9】

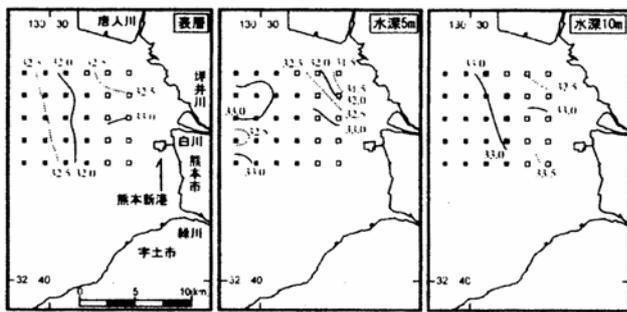
- ・水塊構造について、白川沖における有機物及び泥粒子の沈降場所は、湧水時(2004年5月7日：大潮の2日後)と豊水時(2004年6月9日と10日(小潮)：降雨1日後)に無関係に、干潮時に位置する沿岸水と外海系水の境界である。一方、緑川沖における沈降場所は、豊水時に沿岸水を2分するように表層まで上昇する外海系水との境界である(付図1、図-2)。
- ・表層堆積物の含泥率(2004年6月調査実施)について、白川沖を除いて木下ら(1980)及び秋元ら(2004)と類似の分布を示す。しかし、秋元ら(2004)の結果と比較すると、最近1~2年間に多くの地点で減少している。一方、1979年9~10月にも沿岸から沖に向かって東西に30~50%の低い値が連続している。従って、白川沖では、含泥率は経年変化しやすいことが認められた(図-3)。

資料)1. 滝川清, 秋元和實[以上、熊本大学沿岸域環境科学教育研究センター], 平城兼寿, 田中正和, 西村啓介[以上、熊本大学自然科学研究科], 西村啓介[熊本大学沿岸域環境科学教育研究センター], 渡辺枢[熊本市役所] (2005)「有明海熊本沖の水塊構造と表層堆積物分布特性」海岸工学論文集, Vol. 52, pp. 956-960
 2. 滝川清(2005)「有明海・八代海の底質環境について」第14回有明海・八代海総合調査評価委員会 資料3

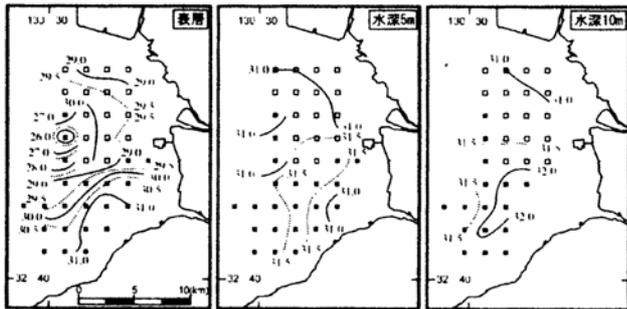


注)右図の秋季、春季のラインは、各水深で観測された潮目(海水と淡水の境界)である。

付図1 熊本沖における渦流と硫化水素臭を伴う泥の分布



(a) 満水時の各層の塩分分布 (2004年5月7日) □: 満潮時, ○: 干潮時



(b) 豊水時の各層の塩分分布 (2004年6月9,10日) □: 9日, ○: 10日

図-2 各層の塩分の分布特性

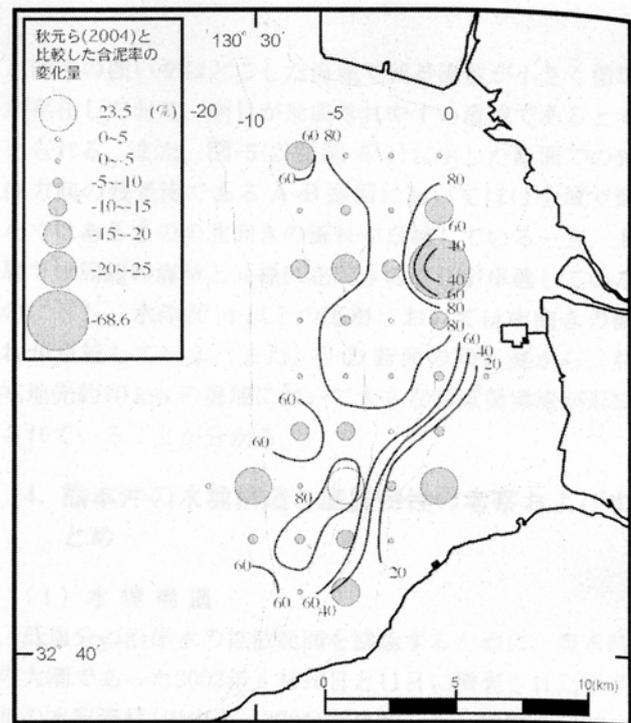


図-3 熊本市沖の含泥率の分布 (%)